第 66 期（1965 年度）

部長／山崎　勇視
監督／南川昌一郎
S 40.4 ～ 41.3

1966 年卒業アルバムより

66 期メンバー

■ 4 年生　石井　一雄・梅山　高弘
伊達　成昭・山口　雅弘
吉田源次郎

■ 3 年生　黒小　恒美・津田　国典
大江　健志・大神　信隆
城戸　秀幸

■ 2 年生　上田　幸浩・案浦　誠一
木津　岩光・下寺　達夫
日永田克也

■ 1 年生　薄　善行・中田　豊
谷川　清博・脇野　有終
柳田　嘉夫・上田　信幸
原　辰也

戦績

全国大会への出場を逃して 3 年、出場を期してスクールカラーのグリーンと白の試合用ユニホームでなく、練習着で県大学リーグに臨む。

西南 40 － 3 学芸大（福岡教育大）、西南 31 － 0 久大、西南 24 － 3 九産大と順調に勝ち進むも、北九大戦に 8 － 22、福大にも敗れて県リーグを終わる。

11 月 23 日、全国大学ラグビー県予選 1 回戦で電子工大（現福工大）と対戦する。前半は一進一退で、3 － 6 で電子工大がリード、後半は電子工大にスピードと体力の差を感じさせられ、後半は一方的に押されて敗れ、インカレ出場を逃す。

電子工大　32 $\left(\begin{matrix}6-3\\26-0\end{matrix}\right)$ 3　西南学院大

［評］ 電子工大は九州大学ラグビー大会の決勝戦で、電子工大９－３鹿大に勝ち初優勝。部創立８ヵ月という新鋭だが、全国大会出場の電波高出身の７選手のほか、九州各県の全国大会出場の好選手をそろえ（西南を受験してくれるよう勧誘した者もいた）、日の出の勢いで全員１年生である。今年より優勝チームが全国大学選手権に九州代表として初参加する。１回戦、法政 27 － 8 電子工大で敗れる（翌年にも九州代表として出場し、１回戦、関大に 26 － 9 で勝ち、２回戦、早稲田に 17 － 49 で敗れる）。

インカレ２位の鹿大、３位の福大は名古屋での全国新制大学大会に出場する。鹿大は準決勝で３－ 18 国士館大に敗れ、福大は初戦の国士館に敗れる。

多数の全国高校大会出場経験者の電子工大は、“強かった”という思い、全員が１年生のチームに敗れた屈辱感、卒業アルバムにも練習着で写っているが、40 年たっても忘れることはできない。 （石　井 記）

光陰矢のごとし

66期・石井　一雄

卒業して 40 年が過ぎ、05 年３月、ラグビー部のことを書いているが、記憶が薄れ、私的になりがちなのをお許し願い、我々の時代のラグビーについて書くことにする。

私は福商在学中の昭和 33 年 10 月に福岡地区予選で筑紫ヶ丘高校と当った、福岡商業の主柱 SO のＭ氏と№８の門田先輩（福大 63 年主将、現 OB 会副会長）であったが、先輩より秀でている筑ヶ丘 OB の SO、それが豊田先輩（西南 63 年主将）であった。学生時代に豊田・門田先輩は宿敵同志であったが、卒業後は共に大阪で就職し、交遊していることを協会に伺った時、豊田先輩のお母さんより聞いたことがある。

この年、福高が全国大会に出場している、そのメンバーに花田先輩（63 期）がいる。私の通った博多二中（現博多中学）は博多商人の子供たちが通う中学で、私の二つ上に赤司（62 期）、一つ上に花田、門田先輩がいる。また、福高から関東の大学ラグビーに進んだ人も多数おり、そのひとりに新日鉄釜石九連覇の主力選手森重隆氏もおり、また、私の町内には日本代表の TB 土屋兄弟（現九州ラグビー協会会長）もいた。

当時元気のいい男の子にとっての憧れは、今のドイツＷ杯、Ｊリーグでブームのサッカーでなく、ラグビーであった。また、昭和 34 年、福商の高校ラガーにとって、「俊足の修猷の神山」（元 OB 会会長）ということで脅威であった。福商は県大会１回戦で敗れ、修猷と対戦することはなかったが、昭和 34 年 11 月 23 日、平和台競技場での福岡Ａブロック決勝、修猷対福工の試合は忘れることはできない。前半０－３で福工リード、後半ノーサイドの２分前に左に出た球を繋ぎ、左隅にトライ。５－３で修猷が全国大会に出場する。この当時の西南ラグビーには、高校時代に全国大会の経験者もいた。

今、平成 15 年３月、この原稿を書くために、資料を調べる中で、昭和 15 年の第 22 回全国中等学校ラグビー大会九州予選で優勝し、九州代表として（九州より一校）、全国

●想い出の記

大会に出場した福岡商業は、１回戦台湾代表の台北工業に勝ち、２回戦、近畿代表の北野中に敗れた福岡商業のメンバーより､松下(副将、西南 42 期主将)・森山繁・豊田・多良・丸林の先輩が西南に入学している。また、昭和 16 年、九州予選に優勝、第 23 回全国大会に出場した旧制福岡中学が、決勝で台湾代表の台北一中に０－３で敗れた準優勝メンバーより、加勢田（主将、西南 43 期主将・九電主将・監督）・今林・森山・半田の先輩が西南ラグビーに参加している。

昭和 18 年、西南学院が第 18 回全国高専大会の決勝戦で 11 － 17 の小差で明大専門部に敗れた同じ年、第 25 回全国大会で福中は、決勝戦で天王寺中学に０－６で優勝を逸している。この福中メンバーのうち、南川･永江･斉藤・鶴丸・加藤の先輩が入学し、西南ラグビー再建に参加する。

戦争で中止、戦後復活の昭和 22 年に西南が第 19 回全国高専で 18 － ３で立命専門部に勝ち、初優勝した年に、福中も第 26 回全国大会で神戸二中に勝ち初優勝。福中のメンバーより、西村（主将、西南 50 期主将）・宮下（23 年主将）・宗・高橋・吉田先輩が西南に入学している。また、昭和 24 年の東京国体において、九州代表の修猷館が近畿代表の村野工業に９－６で勝ち全国優勝しているが、このメンバーからも､佐々倉兄(主将)･中田(副将)･長･石橋･秋吉･藤田先輩が入学している。このように、福中をはじめ、当時、強豪であった地元の修猷・福商・西南中等から多数が、西南ラグビーに参加している。

昭和 16 年生れの私には、その当時のことを十分に知ることができませんが、他にも全国大会に出場した多くの先輩がいたと思う。

平成 16 年度､福岡の高校ラガーベストフィフティンは、全員が関東・関西の大学に進学し、九州の大学に残ったのは一人もいない。全国大会の経験者だけでなく、全国制覇・準優勝・九州代表のメンバー等の先輩たちが、何故、西南に入学したのがわからない。思うに、当時、地元の旧制中学ラガーにとって、西南ラグビーに参加することは、憧れであったということだろうか。戦中に学生生活を送った私の兄が、戦前・戦後の西南ラグビーは「九州学生ラグビー界の雄」でなく､「全国的～」と、また「東京に行っても食べることができなかった時代的なものもあった」と言っていた。

優勝等の好成績を達成するには、メンバーのほとんどを好選手で揃えてくれ、強力なサポートをしてくれる学校もあるが、グランド、部費等も十分でない西南の場合、学生と共に情熱を捧げた故速水伝吉・南川昌一先輩等の献身的て指導によるものである。それは西南ラグビーだけでなく、我々の時代の福高ラグビーの故新島・門田氏、福岡工業の井上氏､修猷館の故溝口･森田氏等というように、栄光の影には、それを支える献身的な指導者が必ずいるものである。その指導者と学生との人間的な苦しみと喜びの中で達成されるものである。この年令になって､「ラグビーも人」と感じる。

西南ラグビーは、昭和 38 年２月、全国高専大会３年連続、新制大学大会６度の優勝と西日本地区のラグビー名門校としての功績から西日本スポーツ賞を受賞する。この賞も、教師等の学校関係者でなく、国鉄職員等の自分の仕事をもちながら、自腹で 33 年間指導された、故速水伝吉・南川昌一監督等のもと

で得られたものである。

原稿を書く中で、資料（49期斉藤守高先輩の「西南ラグビーの軌跡」）等を参考にして書いている。

第19回全国高専大会の昭和22年に、西南18－3立命館専門を破り、初優勝をしたメンバーの中に、福商出身の許山・真次・宗・真鍋・三宅・柴田先輩の名前を見る（決勝戦出場4名）。西南・福商のOB会名簿を照合してみると、昭和4年より22名の先輩をあげることができる（福商ラグビー部は、昭和38年に廃部となった）。「軌跡」の中で、修猷館出身の本城先輩（51期）は、「陸海空の復員、福中・修猷・福商卒ラガーが名物監督速水さんを囲み全国初三連覇を遂行した」と書いている。また、先輩の中には、陸海空また、海兵・陸士等から終戦で復学、西南ラグビーに参加した先輩、西南高専から立教・慶応・早稲田大学本科等のラグビーに進学した先輩もいる。

西南spiritの言葉として、「語学の西南」「ラグビーの西南」といわれたが、「ラグビーの西南」という言葉が消えて久しい。一方、今なお「語学の西南」といわれる礎は、南部バプテスト教会から派遣された宣教師の先生方の力によるものであった。

平成16年12月、西日本新聞は「西南から教会宣教師去る」と報じている。ブッシュ政権の支持団体の南部バプテスト教会の妊娠中絶・同性愛者・女性宣教師の禁止等の保守化によるものである。

「宗教も人」「教育も人」ということ。西南が「強いラグビー」だけでなく、今日、所得の格差拡大といわれる社会、教育も親の所得によって決まるといわれる。母校が、良心の充満の気持を持ち、社会貢献に参加する人材を育てていただきたい。そのためには、時代が変わろうとも、健全な心身が必要だと思う。

寄稿

団体スポーツの持つ意義

ラグビー部監督　南川昌一

新入生の諸君入学おめでとう！また在学生諸君にとっては、新学期を迎えられるに当り、新たな気持で何かを期しておられることでしょう。私は学生生活の諸君等の貴重な時間において、その幾時間かを厳粛な気持でスポーツをやられることを心からお勧め致します。中でも団体スポーツは、特に、意義あるものと思います。なぜなら厳しいトレーニングにおいて、自己の肉体的苦痛に耐え抜く強固な意志を達成すると同時に、与えられた一つのポジションを忠実に守りぬく責任観念が必要とされます。また、団体スポーツなるがゆえに、最も必要とするチームワークを作るための融和精神、すなわち自己を非常に厳しく律し、他人に対して寛容でなければならないという精神的訓練を必要とするが故に、意義あるスポーツであると思います。

団体スポーツの中でもラグビーは、非常に勇気を必要と致します。危険を感じながらも、恐いと思いながらも、強い責任観念において、また正義観念においやむにやまれずやるのが勇気であります。特に、ラグビーは勇気がいるスポーツです。ハードトレーニングに耐え抜く強固な意志。心豊かな融和精神。勇気。これがラグビーに最も必要であり、これこそラグビー精神であります。

本学院ラグビー部は、九州の名門として、全国大学大会において最も優勝回数の多い部であります。しかしながら昨年度我々は破れました。それはトレーニングにおいて、融和精神において、また勇気の点において、他の大学に劣っていたために負けたのであります。監督として深く責任を感ずると共に、反省し現役諸君共々、今シーズンこそはと固く誓い合っています。

我々OBそして現役の夢は、全国大学大会の優勝はもちろんでありますが、学生の王座を獲得することが我々部創設以来の悲願なのです。それは部員数において、素材において、またラグビー環境において、非常に困難なことでありますが、決して不可能なことではないのです。再、OB・現役一体となって、必ず達成しなければならないのです。また困難な道程故にこそ、意義があり、我々の血潮は湧くのであります。我々ラグビー部は、その大きな夢を抱きつつ、日々厳しいトレーニングに励み、固い団結と明朗な笑顔をもって、格調高いチームを形成するのです。

諸君！身体の大小を問わず、運動神経のあるなしにかかわらず、またラグビーの経験の有無を問わず、厳しいトレーニングに自己を試し、そしてそれに打ち勝って見せようという勇気ある諸君の入部を心からお待ち致しております。諸君！人生大いに意気に感じようではありませんか。

人生において、若い諸君等の時代は非常に貴重で、意義ある期間です。諸君等はその貴重な青春を、若人らしく、そして学生らしく颯爽と濶歩されんことを祈ってやみません。

青春は二度とやって来ないし、また何ものにも代えることが出来ない宝なのです。青春時代を無意味に過してしまった先輩の話を聞けば、皆さん方ものんびりとは出来ないでしょう。ところが、皆さんのひとりひとりがその程度の差こそあれ、貴重な青春時代を無駄に費いやして来られたのです。つまり、大学入試という壁に対して青春を犠牲にされたことです。幸いにも皆さん方には、わずかながらも青春時代は残されているのです。だから私は、皆さんがサークル活動をされることを勧める。『青春のもと汝若者濶歩せよ』

＊49期（昭和24年）卒で、昭和22～24年の全国高　専大会、3年連続優勝の中心メンバーである。故速水　伝吉監督のあと監督となる。

（「西南スポーツ」昭和39年4月13日より）

第 67 期（1966 年度）

部長／山崎　勇視
監督／南川昌一郎
S 41.4 ～ 42.3

1966 年（昭和 41 年）、干隈西南大グラウンドにて

67 期メンバー

■ 4 年生　大江　健志・大神　信隆
　　城戸　秀幸・黒小　恒美
　　津田　国典
■ 3 年生　案浦　誠一・上田　幸造
　　木津　岩光・下寺　達夫
　　日永田克也
■ 2 年生　上田　信幸・薄　善行
　　谷川　清博・中田　豊
　　柳田　嘉夫・脇野　有終
　　原　辰也
■ 1 年生　高松　一巳・都地　哲雄
　　富能　敏雄・藤井　丞
　　矢野　賢次・山本　勝彦
　　横田　康夫

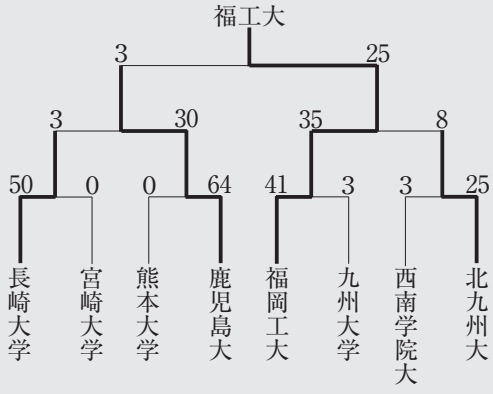
戦績

■福岡県大学ラグビーリーグ

西南学院大	36— 3	九産大
西南学院大	56— 6	福教大
西南学院大	35— 6	九工大
西南学院大	22—12	福岡大
西南学院大	23— 0	福工大
西南学院大	12—10	九州大

■九州地区大会

（12 月 3 日／佐賀大 G）



宿敵福岡大を破り3年ぶりにインカレ（九州地区大会）に出場

■福岡県大学ラグビーリーグ戦

Bパート

5勝1敗で第2位

西南学院大　36 (14－0 / 22－3) 3　九産大

前半3分、西南は九産大陣25ヤード付近でのルースを出し、下寺、黒小と渡り、中央にトライ先制点をあげた。その後も着々と加点し、前半を14－0と大きくリード。

後半も1トライを許したのみで、結局36－3の大差で完勝。

西南学院大　56 (22－6 / 34－0) 6　教育大

西南大の楽勝だった。前半8分と17分にPGをあたえただけで、前半22－6と大きくリード。後半も一方的に走り回り、34点を挙げ完勝。

西南学院大　35 (19－6 / 16－0) 6　九工大

前半2PGをあたえたが、その後着々と加点、前半19、後半16と35－6の大差で勝利。

西南学院大　22 (11－3 / 11－9) 12　福大

前半5分、福大のパスミスをウイングが引っかけ、そのまま中央にトライして先制点。前半を有利に進め、後半3分、相手ゴール前のタッチキックミスを案浦が押えてトライ。しかしその後、相手に3トライを許し14－12と2点差に迫られたが、23分、福大ゴール前のルースより左に回し大神が中央にトライ。さらに28分、センターライン付近から敵のブラインドをつき、脇野、黒小に渡りパントをあげ、大神が飛び込んでトライ。22－12で福大を圧勝。

福工大　23 (6－0 / 17－0) 0　西南学院大

福工大の強力FWに押され苦戦、前半やや押しぎみに試合を進めたが続かず、後半は全く福工大のペースとなり23－0と完敗。

■順位決定戦

Aパート2位の九州大学との順位決定戦が行なわれ、12－10で勝利し、県リーグ3位となる。

西南学院大　12 (3－10 / 9－0) 10　九州大

前夜からの雨が降り止まず雨中戦となった。前半西南はバックスにボールがまわらず苦しい試合を展開、前半10－3とリードされた。後半西南FWが奮起し立て続けに2トライをあげ1点差につめより、さらにタイムアップ寸前にセンターライン付近での相手ミスボールを下寺がひろい、そのまま右中間に飛び込み逆転でノーサイドとなり勝利。

●黒小キャプテンは語る

まあ、今シーズンは3位を確保した訳ですけど、我々の目標は、あくまでインカレ優勝、全国大会出場にある。その意味で、今シーズンの成果は楽観できない。まあ強いて言うならば、福大を連破したこと。これによって、今後の試合に幾らかでも自信めいたものが携わってくれればと思っている。

その他、1、2年生も頑張ってくれた。なにせ未経験者が多いので、すぐに戦力の向上ということにはならない。我々は体力、経

●戦績

験共に劣っているので、がむしゃらのファイトと、チームプレーに徹する事が大切でああある。今シーズンはチームプレー・チームワークということでは、うまくやったと思う。だが、福工大、福大等になると、やはり、体力と巧さがあり、そこの所も良く念頭に入れて今後のチーム作りをすすめなくてはならないと思う。

■九州地区大会

３年ぶりに九州地区大会に出場し全国大会への期待も高まったが１回戦で北九州大と対戦、近年力をつけてきた同大に３－25で敗退し全国への道が閉ざされた。

大会は福岡工大が圧倒的な強さで優勝した。

北九大　25 (6－3 / 19－0) 3　西南学院大

■ 41 年度練習試合戦績

○ 41 年 4 月 12 日

○ 41 年 4 月 24 日

西南学院大　44 (14－0 / 30－5) 5　九工大

○ 41 年 5 月 8 日

九　電　11 (0－0 / 11－3) 3　西南学院大

西南学院大　11 (3－0 / 8－8) 8　九　大

○ 41 年 5 月 15 日

西南学院大　34 (6－9 / 28－14) 0　九産大

○ 41 年 5 月 22 日

西南学院大　11 (3－0 / 8－8) 8　クラブ・キックオフ

○ 41 年 5 月 29 日

福　大　23 (9－11 / 14－5) 16　西南学院大

○ 41 年 6 月 5 日

西南学院大　24 (8－5 / 16－3) 8　北九大

○ 41 年 6 月 17 日

九　電　16 (16－0 / 0－10) 10　西南学院大

○ 41 年 6 月 26 日

西南学院大　70 (16－6 / 54－0) 6　九歯大

○ 41 年 7 月 5 日

福工大　15 (6－0 / 9－6) 6　西南学院大

○ 41 年 8 月 20 日

西南学院大　39 (3－5 / 36－8) 13　ヤナセ

○ 41 年 8 月 21 日（OB 戦）

現役　47 (18－5 / 29－3) 8　OB

わが青春に悔いなし !!

67期・黒小　恒美

創部 80 周年おめでとうございます。

過日、佐賀へドライブしている途中、都市高速から百道の浜を 38 年ぶりに見て、その変貌ぶりに仰天しました。「光陰矢のごとし」月日のたつのは本当に早いものですね。

私は昭和 38 年、奇跡的に西南大に合格し入学しました。根っからのラグビー狂を自称する私は、なんのためらいもなくラグビー部の門をたたきました。故南川監督・故上田主将の時代です。同期入部は６～７人いたと思いますが、、最後まで一緒に戦ったのは鶴田、大江、大神の４人だけでした。まさに戦友です。４年間の想い出は尽きることを知りませんが、特に１年生、４年生のときの想い出は強烈に残っています。

１年生のシーズンも終りに近い頃だったと思いますが、監督に突然呼ばれ、SO をやれとの指示を受けました。高校時代から SH しかやったことがない私には、まさに青天のヘキレキでした。西南の SO は歴代中田・豊田先輩をはじめ、多くの名選手を輩出したポジションです。キック力はない、パス回しは遅い、ステップよく踏めない私は、試合のたびに相手バックローの好餌となり、ボールを捕るたびにタックルされる散々な毎日でした。

主将に指名された４年生のときも、想い出深い年でした。有終の美を飾りたい、インカレ優勝を果たし、全国大会に出場したいと、大きな夢と責任を感じつつスタートした１年でした。結果は福岡県リーグで宿敵福大を 22 － 12 で敗ったものの、福工大に完敗し、Ｂパート２位。

次いで行われた、同位決定戦で九大を敗り、県３位で辛うじてインカレ出場を果たしたものの、初戦敗退で夢が散りました。

私がここで強く言いたいことは、主将としての自分の能力発揮に悔いが残るものの、少ない部員、未経験者の多い中、全員が猛練習に耐え、一致団結して前に突き進み、ある程度の戦績をあげた経験は何ものにも換え難いということです。

若松商業高校でラグビーと出合い、西南学院大学、明治生命、転勤先のクラブチームと楕円球ボール一筋に賭けた現役生活 20 年。

“わが青春に悔いなし”です。

第 68 期（1967 年度）

監督／南川 昌一郎
S 42.4 ～ 43.3

1968 年卒業アルバムより

68 期メンバー

■ 4 年生　案浦　誠一・上田　幸造
　　木津　岩光・下寺　達夫
　　日永田克也

■ 3 年生　上田　信幸・薄　善行
　　谷川　清博・中田　豊
　　柳田　嘉夫・脇野　有終
　　原　辰也

■ 2 年生　高松　一巳・都地　哲雄
　　富能　敏雄・藤井　丞
　　矢野　賢次・山本　勝彦
　　横田　康夫

■ 1 年生　種子田忠博・田原　利章
　　築地　賢三・中原　英介
　　住吉　満

戦績

■インカレ

インカレ、ラグビーは 12 月 2 日、九大グラウンドで行われた。1、2 回戦と勝ち進んできた本学は準々決勝で強豪福工大と対戦。体力差のある福工大は、最初から本学を圧倒。本学は前半 29 分、上田信幸が 25 ヤードライン付近からドロップゴールを決めただけであった。結局、福工大に 44−3 の大差で敗れ去った。

（「西南スポーツ」 S 42.12.9 より）

■目立つ新人の台頭

5 年連続全国大会出場の大記録を持つラグビー部は今年はかなり活躍しそうである。昨年 4 人の 4 年生をおくり出し、全体的に小柄なチームとなった。レギュラーは 4 年生 5 人、3 年生 6 人、残りを 2 年生にたよっている。2 年生の中にはバツグンの選手がいないため、その時の調子を見てどしどし使っていくとのこと。小柄なチームのためフォワードにも重量感がない。しかし、それは練習量とファイトでカバーしている。個人個人の力では福大、福工大の選手とはかなり差があるようだが、チームワークの点では他大学に決して劣らない。チームワークとファイトで今シーズンを通そうとしている本学ラグビー部である。　（「西南スポーツ」S 42.4.14 より）

（昭和 42 年 11 月 6 日「西南スポーツ」より）

部創設以来

九度の全国優勝

＝ラグビー部＝

昭和三年、学生の間から『何か勇ましいことをやろうじゃないか』『それじゃ、ラグビーはどうだ』ということになり、創設されたのがラグビー部である。この部創設時代の先輩の涙ぐましい努力により、前例を破って学院の部として認められた。

昭和六年、全国高専大会に初出場するも一回戦で敗退。同年三月球友と共に幾多の苦難をのりこえてきた創部者を送り出し、ラグビー部に第一時の退歩が始まったのである。しかし純粋にラグビーを愛するものだけは、黙々と練習を続けた。昭和十五年、十七年と全国高専大会に堂々駒を進め、西南ラグビーの名声を広めたのである。だが、太平洋戦争が激化してくるにつれて、このメンバーも歯がぬけるように一人、また一人と学徒動員で出兵していったのである。学院内の各部が解散する中にあって、ラグビー部だけは練習を続けていた。

終戦後の二十二年には州高専大会に優勝、全国高専大に進出日頃の精進がここに実っ、みごと全国優勝の夢が実現しのである。この裏には、十年一の如くチームと労苦を共にされ故速水監督の努力がある。続二十三年、二十四年と、日本ラビー史上空前の三年連続優勝の業をなしとげた。この『三年連優勝』は、日本ラグビー界の驚異的であり、球史の一ページに燦然と輝くものである。

学制の改革で二十六年から新制大学全国大会が始まった。この新制大学としての西南ラグビーの栄進を期して、現在のグリーンと白の横じまのユニフォームを着用した。

百道浜で、たゆまぬ猛練習をしたラグビー部は、新制大学全国大会第一回から三年連続優勝し、戦後六度目六連勝という輝かしい金字塔を打ち立てた。

昭和二十九年、三十年と九州大会に優勝し、三年連続全国大会に優勝し、他大学との力量の差は歴然としているため、全国大会に出場せず、一歩前進させてより高度の技術の交流を求め、関東大学優勝校との定期戦に力を入れた。

その後、名選手の卒業により一時的な退潮期となったが、山崎勇視先生の熱意と情熱をもった指導で、三十四年、三十五年と優勝し三十六年『三度目の三連覇か』と期待されたが、進決勝で不覚の敗北を喫した。

六度目の全国優勝目ざして猛練習中の、昭和三十六年十二月七日速水監督を交通事故で失い、新監督指導の下、速水監督の遺影を抱き栄冠を誓げて全国大会に出場。速水監督の霊に答えて六度目の優勝をなしとげた。

昭和三十八年にも九州大会通算九度目、連続五回の優勝をなし、全国大会に出場。しかし翌年九州大会で福大に負け、また、その後新進の福工大に破れ再度全国大会から見離された。

部創設以来四十数年、過去通算二十二回の九州制覇、その間高専大会三年連続、続いて新制大学大会三年連続、その後三度優勝、戦後九度目の輝かしい伝統と栄誉を残し、九州ラグビー界の名門として発展してきた。

西南の特徴は『少数精鋭主義、力と和』であり、ここに立脚したのが西南ラグビーである。

今、西南ラグビーは退潮期にあるといえよう。我々は現在の苦しみは西南ラグビーの長い歴史の中の必起の一停滞にすぎず、西南ラグビーは栄進の再出発を始めるものであると信じる。（写真は昭和35年の卒業記念）

西南大ラグビー部の思い出

68期・案浦　誠一

大学に入ってラグビーを始めた私にとって、ラグビー部は異次元の世界でした。ラグビーボールは唾で磨く……？　えっー！　まずびっくり。少し汚れたタオルに唾を吹きかけ、シュッ、シュッと音をたててボールを磨く、しばらくすると光沢が出てくる。しかし、初めはさわることもちょっと躊躇した。

1年の時（昭和39年）の合宿は、山口農高（山口県小郡市）であった。来年秋の国体予定地で設備はかなり整備されつつあった。しかし、農業高校のそばには、牛舎や鶏舎もあり、ハエも多く、中にはスズメバチ程、太ったのもいた。合宿中にはうまいものを腹いっぱい喰い、体力保持も大切なことである。早朝練習の後、急いで食堂へ行くと、先着の上田幸造君（同期）がすでにセットされたドンブリ飯の茶碗をハシで、叩いて回っている。最後には、オェーッと言って座り込んだ。ドンブリ飯はハエまぶし飯となっており、味噌汁にも溺死したハエがいた。うまそうな朝食であったが、食欲は全くなくなっていた。

2年の合宿（昭和40年）は大牟田市の延命球技場で近くのお寺に宿泊、夜は蚊に悩まされ、不眠状態であったが、この年は三池工業高校が甲子園で優勝した年で、勝ち進むごとに、号外や早刷りの新聞が、ヘリからグラ

ウンドに投下され、そのたびに練習は中断、またカミナリも多く発生し、これまた練習が中断、不眠に悩まされたが、練習はマイペース。監督やキャプテンの渋い顔が今でも思い出される。

３年、４年の合宿は干隈グラウンド、オンリー。いつまでたっても沈まない太陽が、うらめしかった。新進気鋭の福工大の出現で、その対策もあり、今では珍しいセブンエースシステムを採用。第２SO、または第２FBとして木津君が頑張った。在学中の４年間では、福大に全勝したが、福工大には、３年生、４年生時に苦杯をのまされた。しかし、福工大対策、福大対策として、協議して作ったサインプレイは今でも懐かしく思い出します。

私にとってのラグビーは苦しく厳しい練習とそれに鍛えられた心（闘争心）により、少々じゃあくたばらない体と心が出来たこと、チームワークの大切さを身をもって知ったこと、チームメイトと練習後の解放感あふれる会話や飲み会があったことなど、いろんな面で、その後の私の人生に大きな影響がありました。平成元年に、西日本銀行でラグビー部を創部しました。この時も西南大の後輩の参加（入社）が大きな力となりました。

一緒にグラウンドで楕球を追った仲間は一生の友です。ずっと大切にしたいものです。

西南大ラグビーよ　永遠なれ!!

第 69 期（1968 年度）

監督／南川昌一郎
S 43.4 ～ 44.3

1969 年卒業アルバムより

69 期メンバー

■ 4 年生　上田　信幸・薄　善行
谷川　清博・中田　豊
柳田　嘉夫・脇野　有終
原　辰也

■ 3 年生　高松　一巳・都地　哲雄
富能　敏雄・藤井　丞
矢野　賢次・山本　勝彦
横田　康夫

■ 2 年生　種子田忠博・田原　利章
築地　賢三・中原　英介
住吉　満

■ 1 年生　石原　隆・大賀　正明
坂本憲一郎・平山　彰
三宅建次郎・山本　孝和

昭和 42 年夏、山口県萩市、松下村塾にて

昭和 42 年夏、島根県出雲市日御碕にて

創部80周年を迎えて

69期・薄　善行

いまだにラグビーを楽しんでいる一人として、東京の不惑クラブから地元「迷惑クラブ」へ移り昔の懐かしい顔に出会って感慨を新たにしたことがある。それは、迷惑クラブのクラブソングの歌詞に「敵同士の昔の顔が、今じゃ内輪だオールドラガー……」とあるが、今まさに昔の敵であった人達と共にプレーを楽しんでいることである。彼らと顔を合わせると学生時代のことが想い出される。勝っては喜び、勝てなくて嘆いた日の事を。また、辛く悲しい思い出、苦しくとも楽しかった先輩諸兄や同期・後輩との交流。そして忘れられないのは、当時の監督であった南川さんとの交流である。

大学最後の年は、波乱に富んだ一年だった。昭和43年2月、全学連の活動が吹き荒れたときでもあり、自治会のストライキ宣言で4年生の卒業が危ぶまれたが、全学集会でストライキ中止を訴えて卒業式を実施し、先輩を送り出したこと。3月始に初めての春合宿を実施したこと。そして、春シーズン後半に原君の事故が起きたこと。夏合宿後、9月初旬のリーグ初戦の九大によもやの敗戦。福大にも僅差で破れ、九産大に負けるとインカレも出場出来なくなるし、毎日ミーティングで危機感を煽ったことを思い出す。幸いにして九産大を破り何とか、長崎市で開催のインカレ出場権を得ることができた。

インカレの1回戦は福工大と当たることになり、練習を15人対20人（この年は、1年生部員が16人入部した）のアタック＆ディフェンスを連日実施するなど準備した。試合当日は、杯を交わして部歌を歌い、原君の遺影を抱いて弔い合戦に挑んだ。前半は押し気味に攻めた。最初のチャンス、いい角度のスクラムを得てSO上田がドロップゴールを狙ったが失敗。二度目のチャンスは、SHから読まれて、チャージにあって失敗。続いて、ルースを連取して、左サイドの球を出したら2対1の陣形でしめたと思ったら、CTBがノックオンでチャンスが潰れた。その間、トライを取られて先制された。しかし後半は、福工大はポジションチェンジをするなどして、気を引き締めて攻め立ててきた。実力の差は最初から覚悟のうえの戦いながら、西南の捨て身のタックルや攻撃に彼らは浮き足だったし、手を焼いた。トライチャンスは何度かあったが叶わず、やっとペナルティゴール3点をとるのが精一杯だった。32対3の敗戦だったと思う。苦しかった一年が終わった。翌日、福大対福工大の試合観戦に観客席に行くと拍手が沸き起こったので周りに聞くと、我々の昨日の奮闘に観客が拍手を送ってくれたのである。就職した後、東京で長崎大ラグビー部OBと飲む機会があった時、その中の観客であった彼らがあの時の感動を伝えてくれた。とても印象に残った光景だったことを思い出す。

大学4年間は、長いようで短かった。学生時にはよく判らなかったが、いろんなOBの薫陶を受けて今日があると思う。まあ、生意気盛りの若造をクラブの後輩というだけで身内以上に接して頂いたOB諸兄に感謝している。今でも頭の中は、南川さんと語りあった「博多の西南でなく、日本の西南ラグビー部」にしたいという、あの時代のままである。

後輩もいろんな企業に就職して日本中を駆け巡れば、いつかは企業人としての「日本の西南ラグビー部」として認識してもらえることを期待したい。

第 70 期（1969 年度）

監督／南川昌一郎
S 44.4 ～ 45.3

1970 年卒業アルバムより

70 期メンバー

■ 4 年生　高松　一巳・都地　哲雄
富能　敏雄・藤井　丞
矢野　賢次・山本　勝彦
横田　康夫

■ 3 年生　種子田忠博・田原　利章
築地　賢三・中原　英介
住吉　満

■ 2 年生　石原　隆・大賀　正明
坂本憲一郎・平山　彰
三宅建次郎・山本　孝和

■ 1 年生　衣笠　勝人・長谷川直樹
本田　國哲・小野　裕純
坂上三千人・土屋　剛
富　繁樹・的場　明男

戦績

■対北九大戦
（10 月 19 日・九大 G）
西南学院大 22―11 北九大

■対八幡大戦
（10 月 26 日・九大 G）
西南学院大 53―6 八幡大

■対九産大戦
（11 月 2 日・九大 G）
九産大 26―11 西南学院大

■対九大戦
（11 月 9 日・九大 G）
九　大 23―14 西南学院大

■対九工大戦
（11 月 16 日・九大 G）
西南学院大 38―8 九工大

ラグビー秋季リーグ戦はインカレ出場決定戦をかねて10月19日から始まった。

リーグ戦は社会人リーグに入っている福工大、福大を除いた県内12大学を、A、Bの2パートに分けて行われている。Aパートは本学を始め、北九大、九大、八大、九産大、九工大の6チーム、BパートはAパートより一段実力が落ちる6チームよりなりたっている。

本学は11月16日現在、Aパートで3勝2敗、第3位の成績で11月23日、インカレ出場のキップをかけて社会人リーグの福大と対戦する。福大に勝てば出場権を得ることができ、負ければ失う。

（「西南スポーツ」S 44.11.21 より）

思 い 出

70期・山本　勝彦

高校時代、運動もしなかった私がラグビーという厳しいスポーツを選んだのは仲間に矢野君、横田君、藤井君らがラグビー部員であったのがきっかけだったともいえる。5月のある日ラグビー部室を訪ねると、強面の上級生が狭い部室に将棋等を差しており一瞬入部をためらったことを、今でも思い出す。

身長164㎝、体重58kgの自分が挑戦するのだから、上級生も長続きはしないときっと思っていたに違いない。

厳しい練習が続き、干隈での夏合宿に入ったとき練習試合にWTBで起用された。不器用な自分はパス、キックは下手でも唯一タックルだけは人に負けないものをもっており、厳しいタックルを何回も決め、それを故南川監督に見込んでいただいたと思っている。

その年の冬のインカレの最終戦、福大との試合にレギュラーで起用されたときはとても感動的で、試合内容は良く覚えていないが、対面の相手選手のタックルが見事で、自分も負傷こそしなかったものの、かなりのダメージを受けたことを覚えている。それ以来相手にダメージを受けさせるタックルに磨きをかける努力をしてきたつもりだ。

大学4年間、社会人3年間レギュラーで続けてこられたのも、タックルの素質を見込んでいただいた、故南川監督のおかげと感謝している。

それから、大学時代忘れられない思い出がある。自分の負傷でマネージャーだった原先輩が代役され、タックルを受け、そのまま意識不明のまま帰らぬ人になったことだ。原先輩は10kmマラソンで遅れた自分を折り返し地点からの帰り際に、「山本頑張れ」と力強く励ましてくれたその声がいまでも自分の心の中に残っている。

ご冥福をお祈りしたい。

自分も平成19年9月還暦を迎える。西南大学でよき先輩として、その後会社生活でも大変お世話になった現在西南学院大学ラグビーOB会長の薄先輩には感謝に耐えない。

また、諸先輩、同期、後輩と多くの人に支えられ、いま会社生活を終えようとしている。これからの人生を西南ラグビー精神を忘れないよう強く生きて生きたいと思う。

●想い出の記

西南ラグビーの思い出

70期・矢野　賢次

1970年に卒業後早いもので、35年が経ちました。

干隈グラウンドでの４年間の思い出が今でも脳裏に浮かびます。

西新の学舎以上に通う回数も多く、練習時間も昼から日が暮れるまでボールを追って体をぶつけ、走って全国学生選手権大会をめざして、夏の暑い苦しい強化合宿など青春を謳歌しました。

対戦相手は強豪、福岡工大、福大とは接戦しながらいつも、いつも惜敗でしたが、勝つことを、目標に練習に励みました。

西南ラガーとして、「ボールを持ったら前へ前へ」の南川監督の教えに一喜一憂しながら４年間を過ごしました。部員の団結力、友情などはほかにひけをとるものではありませんでした。

なぜか、実に楽しい良い時代でした。

社会に出てからも、その経験が心の支えになっています。

いつまでも、西南ラグビー部が継続発展するように願っています。

干隈グランドと私

70期・都地　哲雄

1966年に経済学部に入学し、ラグビーには未経験ながら入部させていただきました。練習グランドの干隈まで西新からバスで通う毎日でした。バス停からグランドまでの路は舗装がなく車が通過する度に砂煙を浴びながらの練習通いでした。グラウンド付近は、林や池がありスポーツをする環境もよく夏の合宿などは太陽が西に沈みはじめるとグランドに木々の影がのびてきて私たちを覆い暑さをやわらげほっとしたものです。

青春時代の４年間ここでラグビーを通じて身体と精神を鍛えられたことは、卒業後の社会生活や職業生活の基礎となり、私が人生を生きてゆく背骨として大切なものとなっています。ラグビーについては卒業後レフリーの資格を取得し後輩の練習試合や協会の公式試合に携わりました。特に、アジア大会でシンガポール、韓国のレフリーを行ったことは良い思い出になっています。一方、私が３年の時、４年生の先輩が試合中の怪我で亡くなられたことは大変悲しい思い出です。いまだに、その先輩との練習でのコンタクトプレイの感触は頭の中に残っています。

レフリングの時は、「安全」に配慮し、ルールブックを何百回も読み返し試合に臨むことになりました。

レフリーを通じて、一つの人生における考え「自他を許す」ことを学びました。

以後、この考えを胸に秘め、また、先輩の死にこだわりながら「日々感謝」の気持ちでラグビーにかかわっています。

（昭和 45 年 9 月 7 日「西南スポーツ」より）

インカレ観戦記

スポーツは勝つ事に意義がある

学生スポーツの祭典である夏季インカレは、福岡教育大学を主管校として熱戦が展開された。御多分にもれず、私達学生課職員も手分けして各会場へ応援に出向いた。本年のインカレを観戦して特に気付いた点、又過去のインカレを併せ私の感想を率直に述べてみたい。先ず感ずることは、今回は特に会場が地元であるにもかかわらず、相変らず一般学生、教師の応援者が少ないことである。選手と共に喜び、悲しみを分ち合う西南学院大学の意気を大いに示して欲しいものだと、ちょっぴり淋しい気持ちであった。戦績において、今年は特に国立、地区では南部の進出が目立ったようだ。本学は全般的にいって近年にない上位入賞が多く好成績であったように思う。しかし、今一歩という感がしないでもなかった。強い苦言を申し上げると、充分優勝できぬ実力を備えながら思わぬ伏兵に優勝をさらわれるというケースが見られた。勿論、勝負の世界には運、不運もあるでしょう。「勝負は水ものとも言われる。私も嘗、剣道の試合で勝てる相手に惜敗を喫した苦い経験を何度かした一人である。普通なら大将、副将位を残して楽に勝てる相手であるのに相手を侮ったがため、苦敗をなめた。団体戦の場合、特に気を付けなければならない。自分一人位という個人個人の「寸した気の緩みが思わぬ結果を生むものである。ふと気がついてから切歯扼腕では時既に遅しである。

試合場等でよく聞く言葉で、「まだまだ大丈夫」という。これは危険信号と言っても過言ではあるまい。あっという間にズルズル追い込まれる。手足は縮み固くなる。これに伴ない精神面の動揺はこれを上回る。結局は日頃の技量の半分も発揮できないというケースが多くある。このことは、選手諸君がよく経験されることだと思う。試合の戒めとして、絶対にどんな相手であろうとも軽視してはならない。常に一戦、一戦を大事に戦かわなければならないことは、選手諸君が何時も試合に臨んでの合言葉であろう。特にデリケートなスポーツはなおさらである。この点、今一度反省して見る必要はないだろうか。次に観戦して何度も感ずることは、本学の場合、試合が余りにもスマートであり、おとなしすぎる嫌いがある。今日までこの晴れの大会に備えて、猛練習をしてきながら、「寸した軽率なプレーが一瞬の間に大事な勝てる試合を逸する場合が多い。前者も結構だ。「スポーツは勝つことより、参加することに意義がある」という美辞もあるが、しかし難解な教えだ。私は、スポーツは勝つことに意義がある。勝たなければならないと思う。各自が、そして、クラブ全員が毎日、毎日のあの厳しい練習の積み重ねは勝つためではないだろうか。一方では、自己の人間形成での身心の鍛錬でもありましょう。人間として特にスポーツマンとして、自分の体力・精神力の限界を試み、勝負に挑戦することは若人として大切なことではないでしょうか。ようは、日頃の練習の成果を如何に優勝へ結びつけるかを考えて見る必要があると思う。「常に己れに厳しく」自己との戦いに屈することなく地道に精進されんことを祈ってやまない。

第 71 期（1970 年度）

監督／南川昌一郎
S 45.4 ～ 46.3

左より中原、築地、田原、種子田、住吉

71 期メンバー

■ 4 年生　種子田忠博・田原　利章
　　築地　賢三・中原　英介
　　住吉　　満
■ 3 年生　石原　　隆・大賀　正明
　　坂本憲一郎・平山　　彰
　　三宅建次郎・山本　孝和
■ 2 年生　衣笠　勝人・長谷川直樹
　　本田　國哲・小野　裕純
　　坂上三千人・土屋　　剛
　　富　　繁樹・的場　明男
■ 1 年生　江 副　正和・蒲原　文雄
　　窪田　輝樹・平間　孝行
　　渡辺　俊文・安部　政美
　　田中　　学・松尾　久治

戦績

■大学対抗ラグビー A グループ（Ⅱ部）

	九産大	福大	福工大	九大	北九大	西南大	九歯大	九工大	順位
九　産　大	＊	○	○	○	○	○	○	○	1
福　　大	●	＊	○	○	○	○	○	○	2
福　工　大	●	●	＊	○	○	○	○	○	3
九　　大	●	●	●	＊	○	○	○	○	4
北　九　大	●	●	●	●	＊	○	○	●	5
西　南　大	●	●	●	●	●	＊	○	○	5
九　歯　大	●	●	●	●	●	●	＊	○	7
九　工　大	●	●	●	●	○	●	●	＊	7

西南学院大 34―24 九工大・九産大 14― 7 西南学院大
福　大 80― 7 西南学院大・九　大 42―16 西南学院大
福工大 40― 8 西南学院大・北九大 19―12 西南学院大
西南学院大 22―18 九歯大　　＊西南学院大 2 勝 5 敗

西南ラグビー部の思い出

71期・種子田 忠博

今日は平18年6月26日。梅雨終わりの真夏に近い暑さである。空を見上げるとくらくらするような日射しである。

思えば干隈の夏も暑かった。全く雲のない青空のもと、灼熱の太陽光線を受け真夏の干隈グラウンドを、汗と泥にまみれて走り回り、ラグビーと格闘した4年間を思い出す。

1日の全てをラグビーに傾け4年間の青春の全てを賭けたあの時代が懐かしい。

苦しかった、きつかった、でもラグビーは面白かった。

4年間、いい成績は残せなかったが、あの4年間は青春の全てを費やし、人生の大きな基礎を築いてくれた4年間であった。

故南川監督よりラグビーの指導はもちろん、男の価値、男の美学等など、人生に関することも数多く学び感激も味わわせてもらった。先輩からもラグビーのプレーに関することはもちろんのことグラウンド外のことも数多く学んだ。後輩にはいい指導はできなかったが何とか西南ラグビーのバトンタッチはした。

いまアルバムをめくっていると、1枚のメンバー表の切り抜きの記事が出てきた。

大学2年の時の長崎のインカレで対福工大戦のものである。

前年、福工大は大学ラグビー選手権ベスト4の成績をあげた大変勢いのあるチームであった。32－3で負けはしたが、当時部内も部員のいろいろな事情でベストメンバーでの練習が1年間思うようにできなかった状況であった。福工大の全盛期であったが西南も持てる力を十分に発揮した。悔いが少ない試合であった。

インカレから帰る汽車の中で、酒を飲みながら大声で部歌を歌いながら帰ってきたことが懐かしく思い出される。

この年齢（57才）になって思うことは、伝統ある西南ラグビー部でラグビーを必死でやったこと、すばらしい先輩、後輩に恵まれたこと。

わが青春に悔い無しと思っている。

これからの人生、微力ではあるが、西南ラグビーへの恩返しの意味でも西南ラグビーとの接触面を広げていきたいと思っている。

1年生のとき

第 72 期（1971 年度）

監督／南川 昌一郎
S 46.4 ～ 47.3

1972 年卒業アルバムより

72 期メンバー

■ 4 年生　石原　　隆・大賀　正明
　　坂本憲一郎・平山　　彰
　　三宅建次郎・山本　孝和
■ 3 年生　衣笠　勝人・長谷川直樹
　　本田　國哲・小野　裕純
　　坂上三千人・土屋　　剛
　　富　　繁樹・的場　明男
■ 2 年生　江副　正和・蒲原　文雄
　　窪田　輝樹・平間　孝行
　　渡辺　俊文・安部　政美
　　田中　　学・松尾　久治
■ 1 年生　伊藤　興次・藤山　　悟

戦績

■大学対抗ラグビー A グループ（Ⅱ部）

	九産大	福大	福工大	九大	北九大	西南大	九歯大	九工大	順位
九　産　大	＊	○ 25-16	○ 22-16	○ 57-0	○ 62-0	○ 14-7	○ 52-6	○ 70-0	1
福　　大	●	＊	○ 27-19	○ 114-7	○ 89-4	○ 80-7	○ 60-0	○ 95-0	2
福　工　大	●	●	＊	○ 18-14	○ 88-3	○ 40-8	○ 66-12	○ 41-8	3
九　　大	●	●	●	＊	○ 31-7	○ 42-16	○ 44-19	○ 44-3	4
北　九　大	●	●	●	●	＊	○ 19-12	○ 37-7	●	5
西　南　大	● 7-14	● 7-80	● 8-40	● 16-42	● 12-14	＊	○ 22-18	○ 34-24	5
九　歯　大	●	●	●	●	●	●	＊	○ 29-7	7
九　工　大	●	●	●	●	○ 23-14	●	●	＊	7

新日鉄C　20 $\begin{pmatrix} 6-8 \\ 14-0 \end{pmatrix}$ 8　西南学院大A

思　い　出

72期・石原　隆

昭和43年4月入学して間もない頃、高校時代3年間柔道部に所属していた事から大学に入っても柔道を続けるつもりでいたが、ひょんなことからラグビー部に入部する羽目になってしまった。暫らく練習に通ったがどうしても柔道がやりたくて夏休みを期に退部を申し入れたが強引に合宿に引き戻された。以来ラグビーとの永いつき合いが始まってしまった。当時72期の新入部員は全部で10名であったが、そのうち半数はラグビー未経験者でいわゆる「素人」であった。

授業が終わると毎日脇山口のバス停から干隈のグラウンドまで通った。

ラグビーは走るのが基本であることは理解できるが、なんで毎日こんなに走らねばならないのかと当時は「素人」部員同士で慰めあっていた。

特に「ガキヅラ」と称するダッシュの連続は新入部員には地獄であり、帰りのバスに乗り込むのがやっとの状態が続き閉口した。

しかしながら、徐々に練習の厳しさにも慣れゲームに出してもらえるようになると次第にラグビーの魅力に取りつかれるようになってきた。

大学で何をやってきたかと問われると、「ラグビー」としか答えようがないが、その4年間で今でも忘れられない出来事が3つある。

1つは、1年生の夏であったかと思うが、当時4年生マネージャーであった原辰也先輩が、干隈のグラウンドで練習試合中に、場外で応援していた小生の目の前で相手のタックルを受け頭部を強打し意識が戻らぬまま数日後病院で亡くなられてしまったことである。今でもその時の原先輩の顔を鮮明に憶えているが、同時に大変なショックを受け、ラグビーの怖さをしみじみ思い知った。

2つめは、3年生の夏休みの時、福岡のクラブチームである迷惑クラブ及びドンタククラブを中心に福岡市ラグビー親善使節団が結成され海外遠征が計画された。

九州ラグビー界の強化のために九州の学生を参加させようと企画され、その時の学生6名（西南1名、九大1名、福大1名、福工大1名、久留米大2名）の一人としてこの使節団に参加できたことである。

親善使節団は昭和45年8月6日から18日までの約2週間ラガーマン憧れのニュージーランドとオーストラリアに遠征した。

飛行機が目的地のニュージーランドのオークランドにさしかかった時、眼下には一面緑の絨緞を敷き詰めたようなグラウンドとゴールポストが広がっていた。我々はその数の多さと素晴らしさにただただ目を見張り唖然とした。

ニュージーランドではフィジー対ＮＺマオリ及びノースオークランド対ウェリントン戦のオフィシャルゲームを観戦し、オークランドではポンソンビークラブ、ウェリントンではコラヘキクラブと対戦した。またシドニーでは地元クラブチームのイースタンサバーブスとパラマタクラブを訪問した。

この間我々学生は訪問先で大いに親交を深め、双方のラグビーの違いについて、例えば

●想い出の記

歴史、思想、環境、練習方法そして設備など、非常に多くのものを学び見聞を広げて帰国することができた。

最後に３つめは、４年生の時の九州大会出場をかけた福岡県予選試合のことである。

昭和 43 年から 47 年までの在学中の４年間は、輝かしい歴史を持つ西南ラグビー部にとっては屈辱的な低迷期であり、南川監督はじめ熱心な諸先輩のご指導のもと、他校には負けない練習量と夢よもう一度の意気込みで「西南復活」を目指して頑張ったが、当時全盛期を迎えた福工大や福大の壁は厚く、全国大会はおろか九州大会への出場がやっとの状況であった。思い出の試合は２年間出場が出来なかった九州大会への出場をかけた福岡県予選最後の試合である。

対戦相手は九大であった。この試合に勝った方が九州大会に出られることで双方とも最初から非常に気合の入ったゲーム展開となった。終始シーソーゲームだったがリードされて終盤を迎えていた。

しかし、ゲーム終了直前に味方のバックスは劇的なトライを得た。そしてこのゴールキックが入れば逆転となり、出場権を得られるという大事な局面を迎えたのである。

双方のフィフティーンは味方キッカーの動きを固唾を飲み、祈るような気持ちで見守っていた。キックされたボールはゴールポストに当たり、そしてバーを越えポトリと内側に落ちた。同時にノーサイドのホイッスルが鳴り、我々は歓喜した。今でも忘れられない光景だった。

九州大会は昭和 46 年 11 月 28 日大分市営競技場で行われたが、残念ながら一回戦で福大に 46 対４の大差で敗れ、４年間のラグビー生活にピリオドを打った。大学時代の４年間はラグビー中心であったが、今振り返ると、自分の人生の基礎がそこで形成されたと考えている。

多くの先輩や仲間、そして後輩にめぐり合ったことが最高の財産であり、多くの事を教えてくれたラグビーに感謝している。

（昭和 46 年 11 月 27 日「西南スポーツ」より）

陰の人

南川昌一郎氏、ラグビー部の監督に就任されて、今年で十年になる。前監督ハヤミ氏の後を引き継がれて、西南ラグビー部を指揮しておられる。しかし、南川監督は今年を最後に、監督業を後進に譲るために、十年目を機会として、勇退されることになっている。

『己を知れ、スポーツで』

ラグビー部監督　南川昌一郎氏

さて、南川監督自身、西南ラグビー部のOBの方で、九州に、西南ラグビー部ありと、全国に名を轟かした頃のメンバーの一員であり、昭和二十四年の第一回全国制覇を成しとげた時、バック・ローを務めていた人である。

ラグビーに、人生の意気を感じ汗と泥にまみれた青春の過ごし、いまなお、ラグビーに愛着をもち西南ラグビー部を過去十年間、見守られている。その十年間には、選手と共に涙を流し、苦労されている。

伝統に恥じないように、また、よりよいラグビー部へとの努力は現在のラグビー部に、大きく貢献されている。現在、ラグビー部員は、約二十数名で、他の大学に比べると、極めて少なく、監督の思うままに、いかないのが現状であり、また、悩みの一つでもある。

しかし、三十～四十人は、必ず必要な部であるにも、かかわらず冬季インカレの出場権をめぐっての県リーグ戦において、五勝二敗の戦績を残して、その代表権を獲得するといったファイトぶりに成長させ、成績上昇のムードにのせている。

ところで、部員不足という問題はメンバー編成の際に、ハンディをかかえることは必至である。それゆえ、部員獲得の問題を改めて、クローズアップされ、部員獲得にOBともども必死になっておられる。それは、現在の学生の気質にも関係はあろうが、最近の学生には、スポーツに対する感度の違いをもらしておられる。「これは、特にラグビーだけではないが、体格だけではなく、肉体的苦痛を避けるというムードは隠せない。また私学には、私学のムードが欲しい。本学には、そういう面が欠けて、意えきらないままでいるのではなかろうか。そして、スポーツが強くなることは、大学自体活気づけるのであると思う」と積極的なアドバイスを述べられていた。

とにかく、部員不足という致命傷を背負いながらも、監督、選手一団となって勝利に向かって、試合の八十分間、汗と泥にまみれて戦い抜いているファイトぶりは監督の御尽力の賜ではなかろうか。そして監督は冬季インカレを最後に退くのではあるが、是非インカレに、監督の花道を飾る好ファイトを期待したい。

第 73 期（1972 年度）

監　督／中田　主基
コーチ／岡本　信弘
S 47.4 ～ 48.3

1973 年卒業アルバムより

73 期メンバー

■ 4 年生　衣笠　勝人・長谷川直樹
　　本田　國哲・小野　裕純
　　坂上三千人・土屋　剛
　　富　繁樹・的場　明男
■ 3 年生　江副　正和・蒲原　文雄
　　窪田　輝樹・平間　孝行
　　渡辺　俊文・安部　政美
　　田中　学・松尾　久治
■ 2 年生　伊藤　興次・藤山　悟
■ 1 年生　安部　昌孝・小野山幹朗
　　草野　潔・田原　栄治
　　松村　史朗・橋口　二郎

戦績

■大学対抗ラグビー A グループ（Ⅱ部）

	九産大	福大	福工大	九大	北九大	西南大	九歯大	九工大	順位
九産大	＊	○	○	○	○	○	○	○	1
福大	●	＊	○	○	○	○	○	○	2
福工大	●	●	＊	○	○	○	○	○	3
九大	●	●	●	＊	○	○	○	○	4
北九大	●	●	●	●	＊	○	○	●	5
西南大	● 7-14	● 7-80	● 8-40	● 16-42	● 12-19	＊	○ 22-18	○ 34-24	5
九歯大	●	●	●	●	●	●	＊	○	7
九工大	●	●	●	●	○	●	●	＊	7

〈戦績〉

■ 9月3日（九工大G）

西南学院大　34 (20－14 / 14－10) 24　九工大

■ 10月15日（九大G）

九産大　14 (6－7 / 8－0) 7　西南学院大

■ 10月22日

福　大　80 (38－3 / 42－4) 7　西南学院大

■ 10月29日（九大G）

九　大　42 (14－10 / 28－ 6) 16　西南学院大

■ 11月9日（九共立大G）

西南学院大　22 (12－ 4 / 10－14) 18　九歯大

■ 11月12日（北九大G）

北九大　19 (3－8 / 16－4) 12　西南学院大

■ 11月19日

福工大　40 (8－0 / 32－8) 8　西南学院大

ちょっと遠い昔の夏合宿の思い出

73期・衣笠　勝人

70期の都地哲雄先輩から部史編集のための原稿依頼があった。手紙には「電話します」と付記してあった。「電話を待ってからにするか……」と考えるのが凡人の常。そのままにしておいた。すると、69期の薄善行先輩から督促のメール（何年経っても怖いのはお世話になった先輩）。慌ててペンを取ることにした。

私のラグビーとの繋がりはそもそも高校（福岡県立嘉穂高校卒）時代となる。練習場が通学に便利な校内にあったからといった単純な理由でもある。当時の嘉穂高校ラグビー部は部員数も少なく、勝った試合よりも負けた方が多かったと記憶する。そして一浪後、西南学院大学へ入学、ラグビー部入部と繋がる。

当時の西南は高校時代よりも勝てるチームではあったが、福岡大学、福岡工業大学、九州産業大学が強く、前半は善戦するものの、後半は完敗といった状況が4年間続いた。

もっとも、同期は坂上三千人、長谷川直樹、小野裕純、的場明男、富茂樹（以上フォワード）、土屋剛、本田國哲、そして私、衣笠勝人（以上バックス）の計8名。うち高校時代のラグビー経験者は坂上三千人と私の二人のみ。70期前後の部員構成も似たようなものであったと記憶する。今振り返れば、そんな部員構成で「よく戦ったよな～」と思うのは、私だけではあるまい。

そんな状況下、やっぱり強く印象に残っているのは「干隈グラウンドでの合宿」である。以下、その当時のエピソードをふたつほど紹介してみたい。

ひとつは、当時流行った歌の一つに岡林信康の「山谷ブルース」がある。誰が最初に口ずさんだかは定かではないが、この歌詞が胸に刻まれて、毎晩消灯になると、歌う声が聴こえたのを憶えており、今でも耳に残って離

●想い出の記

れない。青春の一つの景色でもあるが、この頁では歌詞は省かせて頂くこととする。

もうひとつは、早朝の油山往復マラソンである。その当時の合宿は早朝マラソン、お昼前の午前練習、夕刻の通常練習の計３回が通例だった。合宿の後半ともなると早朝マラソンに出たきり、午前練習が始まっても戻ってこない部員が出てきた。何がどうしたかの詳しいところは別にして、「脱水症状」を引き起こして、病院へ運ばれる者も現れるといったアクシデントも重なったような記憶がある。現在とはかけ離れた水分補給で、最近の試合における「ウォータータイム」が羨ましい。

卒業後は、薄善行先輩のご尽力で明治生命に入社。関東社会人一部リーグ（現在のトップリーグに相当）を経験することができた。明治生命の合宿は山中湖等の避暑地ではあったが、大学時代と同様、三部練習だったし、当然のことながら早朝練習もあった。一度は台風の襲来に合い、当然練習は中止だと思われる状況下で、山中湖を一周した記憶がああある。

先の「油山マラソン」ではないが、強くなるためには、それ相応の練習が必要であることを痛感させられたものである。

因みに、明治生命ラグビー部の礎を創ったのは 67 期黒小恒美・68 期日永田克也・69 期薄善行の西南 OB の各位であり、関東社会人四部リーグから一部リーグに昇格させ、1974 年（昭和 49 年）・1975 年（昭和 50 年）と２年連続で全国大会出場を果たしている。

卒業して 30 余年。日記を書いていたわけでもなく、記憶力に自信があるわけでもない。思い出を辿りつつここまでたどり着いた。多少の記憶違いはお許しいただくとして、部史の出来上がりを楽しみにしたい。

（以上敬称略）

第 74 期（1973 年度）

監督／山崎勇視
S 48.4 ～ 49.3

1974 年卒業アルバムより

74 期メンバー

■ 4 年生　江副　正和、蒲原　文雄
　　窪田　輝樹、平間　孝行
　　渡辺　俊文、安部　政美
　　田中　　学、松尾　久治
■ 3 年生　伊藤　興次、藤山　　悟
■ 2 年生　安部　昌孝、小野山幹朗
　　草野　　潔、田原　栄治
　　松村　史朗、橋口　二郎
■ 1 年生　岡　　竜介、呉林　　功
　　後藤　和徳、古野　雅一
　　前田　茂春、吉居　俊行
　　松田　裕一、渡邊　洋司

戦績

＊福岡県大学リーグ戦

A リーグ

■ 9 月 9 日（北九大 G）

西南学院大　46 (12－0 / 34－3) 3　北九大

■ 10 月 21 日（九歯大 G）

西南学院大　36 (14－4 / 22－0) 4　九歯大

■ 11 月 4 日（九大 G）

西南学院大　34 (12－6 / 22－6) 12　九　大

■ 11 月 26 日（平和台競技場）

福工大　16 (4－0 / 12－0) 0　西南学院大

○平成 48 年 9 月 9 日（北九州G）

西南学院大　46（12－0／34－3）3　北九大

吉　居	FW		藤
江　副			田　中
藤　山			高　橋
田　原			渡　辺
三　好			御手洗
小野山			松　尾
安　部（昌）			平　野
安　部（正）			塩
古　野	HB		陣　内
水　崎			山　崎
草　野	TB		有　谷
田　中			多　川
松　尾			今　林
筒　井			日　野
呉　林	FB		山　本

○昭和 48 年 10 月 21 日（北九州G）

西南学院大　36（14－4／22－0）4　九歯大

吉　居	FW		宇　野
江　副			小　川
藤　山			唐　鎌
田　原			五反田
田　尻			茂　山
三　好			山　城
小野山			村　田
安　部			米　山
古　野	HB		岡　本
呉　林			三　阪
草　野	TB		山　本
後　藤			松　田
松　尾			下　川
渡　辺			奏
田　中	FB		内　屋

○昭和 58 年 11 月 4 日（九大 G）

西南学院大　34（12－6／22－6）12　九　大

吉　居	FW		冨　安
江　副			江　藤
藤　山			黒　木
窪　田			新　屋
三　好			秋　月
安　部（昌）			樋　口
小野山			太　田
安　部（正）			仲　野
平　間	HB		山　本
呉　林			松　本
草　野	TB		山　口
後　藤			本　田
松　尾			池ノ内
渡　辺			木　原
田　中	FB		潟　山

○昭和 58 年 11 月 26 日（平和台競技場）

福工大　16（4－0／12－0）0　西南学院大

山　田	FW		吉　居
満　留			江　副
渕　上			藤　山
小　峰			田　原
辻			栗　山
干　綿			三　好
若　木			安　部（昌）
山　本			安　部（正）
財　部	HB		古　野
本　田			呉　林
福　島	TB		草　野
坂　口			後　藤
桑　原			松　尾
堀			渡　辺
松　元	FB		田　中

ラグビーと出会って

74期・渡辺　俊文

昭和 49 年の春、西南学院大学に合格し、その入学金を納入したあと、博多駅のホームで高校の陸上部の先輩である土屋剛さん（73期）にバッタリ会った。そこでラグビー部への入部を勧められた。未経験であることから断ったが、西南のラブビー部は未経験者が多く、陸上経験が活かせると熱心に誘っていただいた。その場は一応考えるということで別れた。

入学して１カ月程して学生生活が退屈に思えてきたころ、以前の話を思いだし、ラグビー部の練習を見学することにした。文字通り見学のつもりで、干隈グラウンドに行ったのだが、着くや否や、うす汚れたジャージ、短パン等を渡され一緒に練習する羽目になってしまった。入部すると言った覚えはないのだが、翌日も練習に来るように言われ、何故か翌日も干隈に行った。

初めて触るボールの扱いが大変で、スローのランパスもボールがフラフラと山なりに飛んでいってしまう。数日経つと、お客様扱いが終り厳しい毎日が続いた。練習が終ると大抵「ガキズラ」が始まる。理由は練習への遅刻、ボールの管理、練習中の態度等様々で、すべて連帯責任。

「ガキズラ」はランパスやキックダッシュを罰としてやらされるものだ。「ガキズラ」の原因の一つにボール磨きがある。当時のボールは革製で、１年生が練習の２時間程前から磨くのだが、その方法は古いクツ下を手にはめて、ボールに自分の唾液を吹きかけ磨いていくのだが、ピカピカ光沢を出すのは結構な仕事だった。このボール磨きとボールの硬さ調整が上手にできてないと練習後に例の「ガキズラ」が待っている。

まず、当事者の１年生が 10 本、その１年生を指導監督する２年生と３年生もといった具合だ。

ラグビーは大学で終りと決めていたが、明治生命に入社し、社会人で続けることになった。社会人でのラグビーも４年で終るはずだったが、結局 30 才過ぎまでラグビー中心の生活が続いた。年齢とともに、体力の衰えを感じ、タバコもやめて精進した。その後はラグビーとは無縁であったが、50 の半ばになった今、薄先輩の誘いで再挑戦することになり、ジャージやスパイクを眺めてワクワクしている。

博多駅のホームから始まったラグビーとの不思議な出会いが、これ程に長い付き合いになろうとは思いもよらなかった。ラグビーとは魅力的なスポーツである。

最後に、現役諸君の活躍とラグビーを通じて社会人としての成功を心からお祈りします。

前列左より松尾、蒲原、田中
後列左より安部、渡辺、江副、平間

第 75 期（1974 年度）

監督／後藤　紀昭
S 49.4 ～ 50.3

1975 年卒業アルバムより

75 期メンバー

■ 4 年生　伊藤　興次・藤山　悟
■ 3 年生　安部　昌孝・小野山幹朗
　　草野　潔・田原　栄治
　　松村　史朗・橋口　二郎
■ 2 年生　岡　竜介・呉林　功
　　後藤　和徳・古野　雅一
　　前田　茂春・吉居　俊行
　　松田　裕一・渡邊　洋司
■ 1 年生　日高　安光・房前　武男
　　淡路屋一郎・加藤　英生
　　中野　忠光
　　甲斐　陽司（旧姓 津末）
　　原　好勝（旧姓 富川）

戦績

■ 9 月 8 日
九産大　38（20－0, 18－3）3　西南学院大

■ 10 月 20 日
西南学院大　19（4－4, 15－8）12　福工大

■ 10 月 27 日
西南学院大　42（30－6, 12－0）6　九歯大

■ 11 月 10 日
福　大　36（12－10, 24－18）28　西南学院大

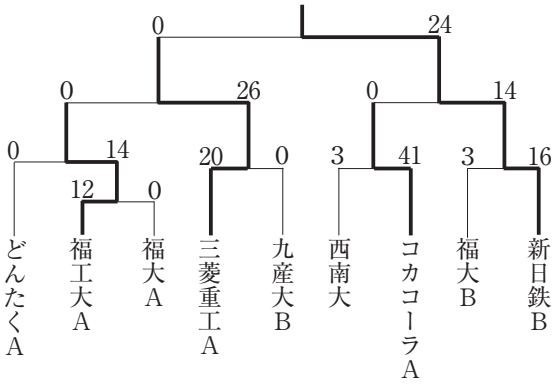
■ 11 月 17 日
西南学院大　50（36－0, 14－0）0　九　大

■ 11 月 30 日
西南学院大　60（26－0, 34－0）10　北九大

■昭和 49 年度福岡県 A グループ

1	九産大	5勝1分
2	福　大	4勝1敗1分
3	西南学院大	4勝2敗
4	福工大	3勝3敗
5	九　大	2勝4敗
6	北九大	1勝4敗1分
7	九歯大	0勝5敗1分

■第 12 回全九州ラグビー大会 A パート



＊1回戦で敗れる

●想い出の記

祝 西南学院大学ラグビー部の創立80周年に寄せて

75期・藤山　悟

宮崎・花木グラウンドに散る

1974 年 11 月 30 日（土）16 時キックオフ、晩秋の宮崎木花グラウンド。必勝を期して挑んだ。九州・県大学対抗戦　準決勝　対福岡大学戦。勝てば、1 位全国大会か 2 位地区大会(端)への道が開かれる大切な試合だった。気合十分で挑んだ試合だったが、前半は 1 トライづつの 7 ： 7。後半は 22 ： 7 のトータル 29 対 14 の敗戦。後半終了間際に、スクラムトライを狙い続けた、FW の松村、栗山、日高や小野山、房前君等の泥と汗にまみれ、勝利への執念がこもった顔が今も思い出される。草野が走り、後藤のタックルに救われ、松田が渾身の力でトライを狙ったこの試合は、前半からいつもの冴え、スピードが見られず、ミスを多発。前半は一進一退。勝敗の分かれ目は後半の中盤に、福大のウイングと FB が中央付近のペナルティーからしかけた単純なサインプレーを止められず、許してしまった 1 トライにあったとの記憶がある。最初にタックルに飛び込んだのが私で、相手のフェイントについていけず、振り切られてしまった。敵にすれば、出足を欠いた防御を抜くことほどたやすいものはない。生涯の脳裏から消えない苦い記憶だ。試合終了後のミーティングでの山崎部長の一言「来年からは勝つために厳しいランパスをやってもらいます」。信頼されて期待を受けて、学校・部長から預かったチームを全国大会に送り出せなかった主将の責任を痛感させられた。部長の本当に悔しさがこもった一言を生涯忘れられない。

●想い出の記

ラグビーの虫　薄善行（69 期）先輩

「もっと関東はスピードがあるぜ、こんくらいのスピードじゃ通用せんぜ。もっと走らんや」

明治生命の薄先輩には公私共に大変お世話になった。御礼の表現のしようが無いくらいだ。合宿はもちろん、仕事の合間に干隈にお出でいただき、練習を指導いただいた。社会人になってからも薄先輩にはいろいろとお手を煩わせた思い出が多い。薄先輩は全国有数のラグビーの虫であろう。その行動範囲はビジネスマンのボランティアの枠を大きく超えて尊敬に値する。ラグビーを、そしてラブビー人をこよなく愛する薄先輩は九州、関西、関東と人脈は限りなく広い。人間として先輩として、企業人として見本となる人間である。酒も大いにご馳走いただいた。薄先輩ご馳走さまでした。

ロマンチスト上田幸造（68 期）先輩

「なんしよっとや。走らんや！」

だみ声が干隈に響く。顔も声も迫力満点の上田幸造先輩は 1974 年春の追い出しコンパで、「俺の哲学は、ロマンとパッションたい」。と、だみ声で我々後輩に餞の言葉をかけて頂いた。これからの長い人生は、ロマンを持って「情熱」の熱を胸に生きらんといかんばい。と、上田先輩は厳つい顔に笑みを湛えながら語りかけた。こん先輩には顔に似合わず、ロマンチストやね。と、見直した鮮明な記憶が蘇った。全九州のフッカーを長年守り続け、スクラムの強さ、フッキングの鮮やかさは一級品。１～２年の頃は、私も３番であり、上田先輩と幾度となくスクラムを組ませて頂いた。首の強さ、上半身の強さがまだ皮膚の記憶に残っている。怒ったお顔と微笑んだお顔の落差が大きい。強い九州の男の笑顔は純粋やね、と思った。いつまでもお元気で。

伊藤興次（同期）という博多者

伊藤興次（旧姓白石）の奥さんは美人である。学生恋愛で卒業後に目出度くゴールイン。金もなく、恋人もいなかった私には金持ちのぼんぼんと映った。学生の身分で、マイカーも乗り回す本当に羨ましいアイビーな博多の男やった。

この伊藤は、唯一のラグビー部の同期生の生き残りだ。どういう訳か、ことごとく同期生は辞めていった。伊藤は生き残ったが、彼はラグビー素人。高校生まで特段の運動部を経験せず、突然大学にはいってから、ラグビー部に入部する奴の気が知れない。体も小さい。しかも足もさして早くない。その根性は見上げたものだ、と今になって感心する。伊藤の真骨頂は寡黙。つらくても、音を上げない。黙っている。当然試合もなかなか出れないが、黙々とラグビーに打ち込む姿が思い出される。最近はめっきり白いものが増えたが、九州モンの雰囲気は相変らずだ。彼が、私の結婚式で言った一言。「久しぶりに藤山に会ったが、人間の性格はいくつになっても変わらんちゃね」。同期ならではの思いが胸に響いた。また幾度も飲もう。

左より橋口（76 期）、藤山（75 期）
松尾（74 期）、伊藤（75 期）

左より宮崎（76 期）、伊藤（75 期）
藤山（75 期、後藤（77 期）
湯布院で夏合宿